身の周りの対象・他者とのよりよいかかわりを築きながら，自立する子どもをめざす

三上　祐佳里

自然とふれあい、季節を体感する活動とともに，「和」の生活様式を取り入れた活動『附属っ子ミュニケーション“和み”大作戦』を中心に生活科全体のカリキュラムを作成し，子どもたちの自立をめざして実践した。実践の結果、生活科で学習・体験した内容が，子どもたちの普段の生活にも活かされるなど活動の広がりが見られた。また、日本の伝統的な文化や「和」の生活習慣を意識的に取り入れることによって，それを手段として，子どもたちが対象・他者に対して深く関わっていくことができた。今後，教師が意識的に取り入れたカリキュラムと，子どもたちの興味や関心を組み合わせ，どのように発展させていくのか課題が残る。

キーワード：『“和み”大作戦』，「和」の生活様式，「おもてなし」，「ひと」

1．『自立する子ども』とは

本年度、生活科では教科の研究テーマを『自立する子ども』とした。その中で，『自立する子ども』を具体的に，「自分でできる子」「周りに広められる子」「振り返り生活に活かせる子」の３つであると考えた。

生活科とは，子どもが，まず対象によりそい，問題意識をもって対象に働きかけ解決していく学習であり，一人ひとりの子どもの自立をめざした営みである。自分の思いをもって対象によりそい，自分と対象のよりよい関係を築く。本学年は１年生である。小学校に入学し，新しい環境で過ごすことに慣れず，落ち着かない児童も少なくない。学習の中に，「和」の生活様式を意識的に取り入れることによって，おだやかな心地よい空間で落ち着いて学習が進められると考えた。また，その場の心地よさを作り出しているのは，その場にいる自分を含めた一人ひとりの存在であるということに気付かせることで，自分を大切にし，他者に対して思いやりのあるよりよい働きかけができる子どもの自立をめざした。

2．「自立する子ども」をめざして

「自立する子ども」をめざす方法として，主に「和」の生活様式に根ざした学習活動『附属っ子（コ）ミュニケーション“和（なご）み”大作戦』（以下『“和み”大作戦』）を計画し実践した。年間カリキュラムを作成するにあたっては，生活科の授業時間のうち，隔週１時間で『“和み”大作戦』を扱うことにした。また，この年間カリキュラムは，子どもたちの興味や関心に合わせて計画を変更，発展させるなど柔軟に取り扱った。段々と，子どもたちの生活から遠ざかっている「和」の生活様式を意識的に取り上げることで，子どもたちにそのよさを再認識させたいと考えた。子どもたちが，「和」の生活様式を再認識することで，そのよさが日ごろの生活にも活かされ，子どもたちの自立が進むと考えた。

『“和み”大作戦』の内容として，特に次の内容を重点的に取り扱った。

①『日本の季節感』を感じる

１年生を対象にしていることもあり，とくに「学校たんけん」をとおして，四季の移ろいを『ながめ・手に取り・嗅ぎ・聞き・味わう』ことで身体全体で感じ取らせた。また，そこで見つけた季節を，身近に取り入れて楽しむ場を設定した。さらに，学校農園を利用して，さつまいも，大根，カブ，ニンジンなどを育て，収穫したものを味わうことで季節を感じる活動を設定した。

②よき『日本の生活習慣』を身につける

“和み”の空間に流れる心地よい雰囲気を感じることに重点をおき，主に和室での初歩的な礼儀・作法を取り扱った。形式的なマナーやルールだけを身につけることのないように留意した。

③『日本の伝統文化』にふれる

『日本の生活習慣』と関わり，『夏祭り』や『お正月』など，日本の伝統行事を取り上げ，その文化に触れる機会を設定した。

④他の教科・領域との関連

「学校たんけん」で見つけた草花などを飾るための器作りや，学校農園で作った作物を使った和菓子作りなど図工科や食育教育との関連をはかった。

⑤保護者や地域の方々とのふれあい

より充実した体験や活動を設定するため，保護者や

地域の方々に協力していただいた。活動ボランティアとして『ふぞく“和み”隊』と名づけ，お茶室体験やお茶のお作法の指導など，主に『“和み”大作戦』の授業に参加していただいた。

３．授業の実際

本年度の生活科では，『附属っ子ミュニケーション“和み”大作戦』と名付けたカリキュラムを，隔週１時間，年間を通して行った。また，それ以外の週２時間で「学校たんけん」や季節の変化を見つけ感じる活動を取り上げ，生活科全体のカリキュラムを作成した。

以下，主な内容を取り上げたい。

３．１『“和み”大作戦』

季節の草花を教室に飾るために，花の生け方を扱ったり，和室での基本的な立ち居振る舞いや，簡単なお茶の立て方，いただき方など，子どもたちが楽しく活動できることを中心に扱った。また，発展的な活動として，和歌山城紅松庵でのお茶席体験や，本校の夏祭りでの「和みお茶会」体験などにも取り組んだ。

６月下旬、和歌山城のお茶室「紅松庵」をお借りして，本格的なお茶席を体験した。この日までに，小学校の会議室や中学校の礼法室を使って，お茶のいただき方や，和室でのお作法の基礎を扱っている。しかし，１年生にとっては，初めての和室でのお茶席体験になるので，あくまでも雰囲気を楽しむことを重点にし，お茶室入口の立礼席で座ってお茶をいただくことにした。当日は，『ふぞく“和み”隊』（保護者による活動ボランティア）のみなさんにお茶の準備など，子どもたちの学習を助けていだたいた。

これまでにも，何回かお抹茶をいただく練習をしているが，やはり場所が変わると気分も変わるのか，この日はとくに「おいしい。もっと飲みたい。」という子どもたちの声が多かった。（図１）

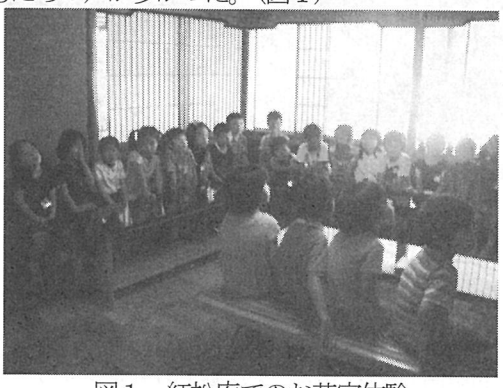

図１　紅松庵でのお茶室体験

この６月の和歌山城でのお茶室体験から，身近な人にも自分たちの味わった“和み”の気分を味わってもらいたいという気持ちが子どもたちに芽生えてきた。

そこで，お茶室体験をした２年生と協力してお茶会を計画した。場の設定や仕事の分担は２年生が中心となって計画し，１年生は、自分の家族など身近な人に招待状を作って送ることにした。当日は２年生が準備したお茶やお菓子を，来ていただいたお客様に自分から声をかけながら，丁寧に出すことができた。

当日は，招待客の他にも大勢のお客さまに来ていただき，お茶とお菓子を楽しんでいただくことができた。また，この日にも，『ふぞく“和み”隊』のみなさんに、お茶やお菓子の準備など、裏方の仕事に協力していただくことができた。（図２）

図２　おくやま祭り“和み”お茶会

「おくやままつり“和み”お茶会」の活動では，計画や仕事の分担など，中心的な活動は２年生であったため，１年生が中心になって活動することはあまりなかった。しかし，この活動が，２学期には「自分たちが中心になって，誰かをお茶会に招待したい」という願いにつながっていった。そこで，手作り紙芝居を読み聞かせてくれた２年Ａ組の生活科の授業に参加させていただき，自分たちで立てたお茶を飲んでもらうことにした。この体験を通して，自分たちの立てたお茶を飲んでもらい，喜んでもらえたことが，子どもたちにとってとても嬉しく，その後の活動の意欲につながっていった。そして，「もっとみんなにお茶をたてたい」「他のクラスも招待したい」という気持ちがどんどんふくらんでいった。

１２月には，いつもペア学級としてお世話になっている６年Ａ組におもちつきに招待してもらい，そのお礼としてお茶を立てることができた。

『“和み”大作戦』の体験から，子どもたちの喜びや気持ちが広がり，さらに活動が広がっていく様子が見られた。（図３）

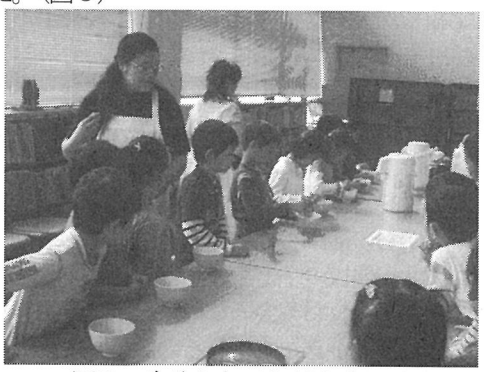

図３　自分たちでお茶を立てる

３．２『附属っ子　あきのおもてなし』

９月に入り，本校と隣接する城北小学校の１年生との交流を行った。そこで，これまでの『“和み”大作戦』

のカリキュラムや「学校たんけん」，季節の変化を見つけ，感じる活動と合わせて，これまで学習したことが子どもたち同士のコミュニケーションに活かせる単元を構成した。（図４）

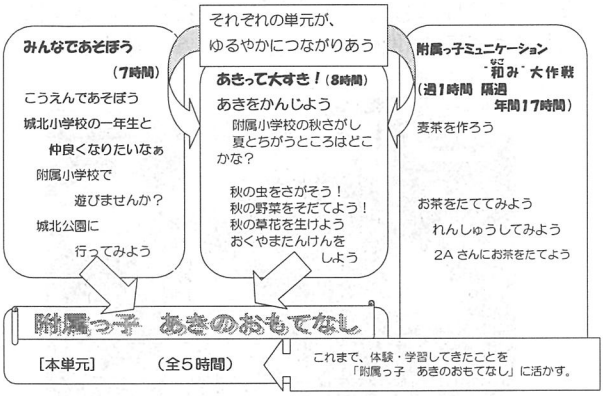

図４　単元構成図

９月から取り組んだ「みんなであそぼう」という単元で，一度，城北小学校の子どもたちと本校で遊んだあと「城北小学校の子にまた会いたい」「もう一度、学校に呼べばいい」という子どもたちの願いが生まれてきた。そこでもう一度，城北小学校の児童を附属小学校にご招待することにした。前回は「一緒に楽しく遊ぶ」ことを中心にした活動だったので、今回は、「もっとべつのことを考えてみたら」と働きかけ，『おもてなし』という言葉を提示した。

『おもてなし』という言葉を聞いて，子どもたちから，「人をよぶ，お茶・お菓子を出す，ちょっとスペシャル」などというイメージが出た。子どもたちのもつ，これらのイメージを大切にしながら，まず，一人ひとりがそれぞれの『おもてなし』の計画を考えた。『"和み" 大作戦』の授業で，これまでに関わりのあったクラスをお茶に招待し，お茶をふるまう経験をしていたこともあり，「城北小学校の子にも，私たちの立てたお茶を飲んでもらいたい」という計画が多く出ていた。一人ひとりが計画を出し合い，話し合ってクラス全体として，お茶会を中心に『おもてなし』の計画をした。３人１組でグループを作り，城北小学校の１年生２人を「おもてなし」することにした。それは，「おもてなし」する相手を「城北小学校」という漠然としたものではなく，しっかりと相手の顔や様子を思い浮かべながら準備をすすめられるようにするためである。

「ひと」を対象に学習していることを意識させるため，これからの活動で相手の顔を思い浮かべやすいように，城北小学校の子どもたちに招待状を書くことから準備を始めた。お茶会の準備については，どんな準備をすれば相手が喜んでくれるのか，具体的に考えてから作業に移った。初めは，あまり活動のイメージが湧いてこない児童もいたが，周りの様子を見たり，実際に手を動かして具体的に作業をしていくうちに，お茶会に準備したいものや『おもてなし』のアイデアが新しくできていた。

単元構成では，『計画→準備（活動）』という流れで授業を考えていたが，児童の活動の様子を見ていると，活動と計画が分離しているのではなく，実際活動していくうちに具体的なイメージが固まり，新しく作りたいものやアイデアが浮かんでいるようだった。

また，普段の生活科の授業では，自分の活動にばかり意識がいき，あまり関わり合いのなかった児童も，グループで活動をすることで，飾り付けの折り紙の折り方を教え合ったり，協力してどんぐりゴマを作ったりと積極的に関わり合っていく様子が見られた。さらに，活動が進むとグループの枠を超えて関わり合っていく様子も見られるようになった。例えば，折り紙の折り方を聞かれた児童が最後まであきらめずに折り方を説明しようとしていた。結局できなくても，「ぼくも，この折り方できなくてごめん。今度までに調べてくる。」と何回も相手に伝えるなど，相手の気持ちを考えた言葉がけも見られた。

「おもてなし」当日は，それまで十分に対象と関わってきたこともあり，一人ひとりの子どもたちが自信をもって活動できていたように思われる。お茶を出し終わったあと，それぞれのグループを中心として考えた遊びをするときも，おもてなしをする相手のことを考え，楽しんで帰ってもらおうとする子どもたちの姿を見ることができた。

この単元を通して，自分の関わる相手をしっかりと意識できていたことが，子どもたちの自主的な活動につながり，よりよいコミュニケーションにつながっていった。（図５）

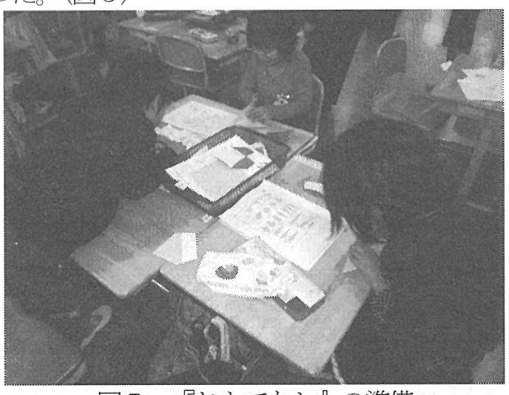

図５　『おもてなし』の準備

４．授業の考察

４．１『"和み" 大作戦』について

年間を通した『"和み" 大作戦』のカリキュラムについては，当初「段々と、子どもたちの生活から遠ざかっている「和」の生活様式を意識的に取り上げることで，子どもたちにそのよさを再認識させる」ということを目的としていた。しかし，実際の子どもたちの様子には，これと若干のズレがあるように思われた。

お茶やお花，お茶室の体験など，どれをとっても子どもたちは意欲的に興味をもって活動しているが，そ

こに「再認識」という様子はあまり見られていない。授業中の発言やつぶやき，授業後の感想を見ても，「やったことがある」「おうちでやっていた」という自分の生活を振り返った表現をするよりも，「やってみて楽しかった」「おうちでもやってみたい」といった，新しいものに出会った楽しさ・喜びを表現しているものがほとんどであった。そのことから，「和」の生活様式を好意的に喜んで受け入れているとともに，子どもたちにとっては「自分たちの生活とは違った文化を体験することが楽しい」という意識が強かったのではないかと考える。お茶を立てたり，お花をかざるなど，このカリキュラムで体験したことをお家でもやってみたという話をよく聞くことができた。物置にしまってあったお茶の道具を出して使えるようにしたり，近くで催されているお茶会に興味をもち，家族で参加するなど，子どもたちが家の人と一緒に，学校とは違った場所で活動を広げていた。子どもたちが，新しい文化として体験した「お茶を立てること」「お花を活けること」を家庭で話すことが保護者にとって，「和」の生活様式の「再認識」につながり，家族で活動を広げるきっかけになったものと考える。

このカリキュラムは教師が計画したプログラムである。しかし，十分に子どもたちの興味や関心に合っていたからこそ，これらの広がりが見られたのではないかと思われる。さらに，“和み”というテーマで年間を通してカリキュラムを作り実践することで，それぞれの活動が単なるイベントとして終わってしまうのではなく，個々の内容は違っても学習のつながりを意識させることができたように思う。そのことが，子どもたちの生活科の学習に対する意識付けを強め，授業だけでなく，家庭や地域など，生活の場での活動につながったと考える。

４．２「附属っ子　あきのおもてなし」について

城北小学校の１年生と交流するにあたって，『“和み”大作戦』を活かして単元を構成したことで，子どもたちの活動にまとまりと自信がでていたように思う。本校は公立校より校区が広く，いろいろな地域から子どもが通ってくるため，地域の行事や遊びなど，子どもたちの中に共通の体験が少ない。そのため，城北小学校の子どもたちと交流するといっても，その遊び方や関わり方にそれぞれに違ったイメージがあり，子どもたち同士の話し合いの視点を定めることが難しかった。『“和み”大作戦』のカリキュラムでの学習が，子どもたちにとって共通の体験となり，グループでの話し合いの視点が定まる助けとなっていた。話し合いの視点が定まることで，より活発に意見を出し合い，グループでの活動のアイデアを広げることができていたように思う。

また，実際に城北小学校の１年生という「ひと」を意識し関わることで，研究の目的である「その場を作り出している自分を含めた一人ひとりの存在が大切であるということに気づくことで，他者に対して思いやりのあるよりよい働きかけができる子どもの自立」を達成することができたと思う。隔週１時間の『“和み”大作戦』では，どうしても子どもたちの活動が個を中心としたものになり，何のためにしているのか，誰を相手にしているのかといった「ひと」を意識させることが難しかった。具体的に「城北小学校の１年生」を対象とすることで，『“和み”大作戦』での学習が自分達の活動とつながり，自然に「対象とよりよい関係」を作ろうとする手段として活かすことができていた。

この単元で，授業後の感想やつぶやきの中に，自分と関わる人の様子が出てきにくい児童が何人かいた。これらの児童は，季節の変化を見つけたり，新しいものを発見することは得意である。『“和み”大作戦』だけでは、見えてこなかった児童の様子が，「ひと」を中心とした単元に取り組み，継続して子どもの表現をみとることで浮き彫りになってきたように思う。

５．成果と課題

生活科は，子どもたちの興味や関心，気づきを大切にし，それらを発展させて学習が進む。『“和み”大作戦』は，教師主導で計画されたカリキュラムではあるが，「和」の生活習慣という内容は，子どもたちにとって十分に興味や関心をもつことができるものであった。学習のきっかけは純粋な子どもの思いや気づきとは違っているかもしれないが，『“和み”大作戦』をスタートに，子どもたちが，さらに発展した課題を見つけることのできるカリキュラムであることがわかった。

また，「和」の生活習慣がもつ“和み”の雰囲気から，自然と学習対象に落ち着いてよりよく関わることができていた。一緒に学んでいく仲間や自分の思いを伝えたい相手など，他者に対しても，その関わり方を考えて活動できるようになってきた。

今後の課題は，隔週１時間扱いで計画した『“和み”大作戦』のカリキュラムと，それ以外の単元の内容のつながりを考え，より子どもたちの興味や関心を広められるように生活科全体のカリキュラムを構成する必要があることだと考える。『“和み”大作戦』で学習する内容は，生活科の他の単元とうまく組み合わせ活かすことで，さらに子どもたちの活動を広げる，深めることができるからである。生活科の中での，さらに効果的な『“和み”大作戦』のカリキュラムの組み方を考えたい。

参考文献

文部科学省（２００８）小学校学習指導要領解説　生活編教育出版（２００８）　小学校学習指導要領の解説と展開　生活編